発刊のことば

東洋大学創立一〇〇周年記念事業委員会副会長
（学長）　神　作　光　一

一八八七年（明治二〇年）、井上円了先生によって、東京本郷竜岡町の麟祥院内に私立哲学館（東洋大学の前身）が創立されて以来、一九八七年（昭和六二年）の秋で、わが東洋大学はちょうど一〇〇周年という大きな節目を迎えました。この一世紀に及ぶ間、本学が歩んできた道は、決して平担なものではありませんでした。むしろ、明治・大正・昭和と三代にわたる激動と混迷の歴史をくぐり抜けて来たとさえ言えます。それだけに、今日（こんにち）まで本学を支えてきてくださった多数の先人のご労苦に対し、ここに改めて感謝の意を表したいと思います。

とりわけ、一九四五年（昭和二〇年）四月、第二次世界大戦下に置かれた本学が空襲によって、図書館・講堂・三号館以外の建物を焼失してしまったこと、その後四か月ほど経った同年の八月、終戦を迎えて、戦火の中で荒廃した本学が復興をめざして、さまざまな取り組みに努めて来たこと、さらには一九六七年（昭和四二年）から一九七三年（昭和四八年）へかけての学園紛争の激しい嵐と一生懸命対応して来たこと等々を考えますと、目頭が熱くなる思いがいたします。

思えば、戦前、文科系の単科大学であった本学が、戦後は総合大学となりました。そして現在では、白山・朝霞・川越の三キャンパスに六学部を擁し、一つの短大、二つの付属高校を持ち、学生数約二万人を数える私立大学にまで成長し発展して来ました。このように、量的な拡大を遂げた本学が、第二世紀への旅立ちにあたって必要としている施策は、一体何でありましょうか。それは、創立者の建学の精神を継承し、教育・研究の水準を現在以上に高めることによって質的な充実をはかり、私立大学としての個性や特色を力強く前面に打ち出すことなのだと考えます。換言すれば、より個性的な大学を目ざすことによって活性化をはかり、大学のキャンパス全体に香り高い思索の雰囲気が溢れ、教職員と学生との間に学ぼうとする真摯な姿勢、研究しようという旺盛なる意欲が漲っていることが最も望ましいと考えます。

かかる認識に立脚して、本書に所収されている、十回に及ぶ「東洋大学創立一〇〇周年記念講演」は計画され、実行に移されたわけであります。お蔭様で「目次」に明らかなごとく、「特別記念講演」「記念講演会」「国際シンポジウム」「市

民大学講座」「市民大学講座合同講演」「私立大学学長シンポジウム」「国際交流懇話会」等々、まことに幅広く、バラエティに富んだ内容となりました。

ご多忙中にもかかわらず、私どもの意向をご理解くださった上で熱意溢れるお話をしてくださった講師各位に対し、深甚の謝意を表する次第であります。また、このことの推進実行のためにご尽力くださった「講演部会委員」の方々、ならびに学事課をはじめとするご関係各位に対しても、厚くお礼を申しあげます。

終りに、本学は創立者の大切な理念の一つである「開かれた大学」を目ざして、今後も機会あるごとに講演会、講座、シンポジウム等を開催して参りたいと念願しておりますことを申し添えることによって、本書の「発刊のことば」のご挨拶とさせていただきます。

一九八九年（平成元年）二月十六日